

氏名	かめ だ まさ み 亀 田 勝 見
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 130 号
学位授与の日付	平 成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 哲 学(中 国 哲 学 史)専 攻
学位論文題目	六 朝 道 教 に お け る 人 間 観 の 研 究

(主査)

論文調査委員 教授 池田秀三 教授 麥谷邦夫 教授 礪波 護

## 論 文 内 容 の 要 旨

## 序 論

本論文においては、六朝道教における人間観とその展開についての考察を行う。「人間観」と言ってもそこに含まれ得る内容は幅広く、また多岐にわたる。それは自己および他の自己と同種と認識される存在を、様々な立場の人間が様々な動機によって様々な角度から捉え思索するが故である。本論文にて取り扱う「人間観」とは、その中でも運命観及びその周辺である。また、六朝期の思想を扱うのは、仏教思想が流入した漢代より数百年たち、徐々に仏教の勢力が拡大していく最中、仏教に対抗する道教や儒教の人々が、自らの思想の枠内で如何に人間の可能性や運命を解釈するか、或いは如何に仏教を摂取して思想的変化・発展を遂げるかを見届けることに、重要性を見出すからである。さらに、六朝道教思想を扱うのは、道教が当時の儒教や仏教以上に人間についての生々しい捉え方を見ることができ、人間観と密接に関わった諸思想を見て取ることができるからである。六朝道教における人間観、特に「神仙可学」の思想や運命などの思想を分析することは、六朝時期の人間観を捉えることのみにとどまらず、思想史上の重要な思想課題の背景の分析ともなるとも考えている。

## 第1章 葛洪における運命と仙命

『抱朴子』の著者葛洪が唱える仙道は、金丹服用を中心とした努力によって神仙になることを目指す。しかし一方で、彼は「仙命」を唱え、人には素質の点で神仙になれるかどうかが決まっているとする説も提示しており、矛盾しているかのような様相を見せている。では、神仙思想と直接は関わりのない『抱朴子』外篇ではどうであろうか。

『抱朴子』外篇には運命を直接論じる篇をはじめとして運命に関する言及は幾つか存在するが、そこでは命定論が展開されており、どうにもならない運命に対する執着をやめ、節義の士として生きるべきことを主張する。しかし一方で、政治論・隠逸論等を扱う場合は、一転して人の行為の選択が自らの安全或いは世の安定を導くことができることを論じる。つまり、『抱朴子』内篇の神仙思想で見られる矛盾的様相が外篇でも見られるのである。

葛洪の命定論は、当時特に独創性があったわけではない。葛洪に先立つ人物について見ると、魏の李康の著した「運命論」では、やはり命定論的色彩が濃厚で、定まった運命を甘んじて受け入れ、名をなすことにその生き甲斐を求めよ、と説く点も葛洪と同じである。ただ子細に検討すると、行為によって死後名を残すことができる点や、君主がその行為によって世を正しい方向に導くことができる点などから、行為は自分の生涯内における境遇以外には有効であると考えられていたことが分かる。歴史的時軸の中で人間の行いを捉えていこうとする精神は、司馬遷が『史記』を著そうとした動機の一つに、報われることなく埋没していく人の善行を後世に伝えることを目指す精神等とも共通している。

自らの行為によって自らの境遇を左右し得ると考える思想を「因果論」と便宜的に呼ぶならば、葛洪の因果論に影響を与えた人物として、魏の嵇康が考えられる。また「演連珠」の作者である晉の陸機も影響を与えた人物であると思われるが、彼も因果論と命定論をそれぞれ独立した条で提示しており、葛洪との共通性が窺える。

以上の点より、葛洪は、先人よりの影響で命定論を認めてはいるが、李康ほど徹底した命定論者ではなかったようで、嵇

康の影響等により因果論にもその目を向け、人為の可能性を李康以上に広く適用している。また、陸機のような相矛盾する思想の並存容認の姿勢をも取り入れた結果として『抱朴子』外篇を著したと考えられる。

一方、『抱朴子』内篇によれば、神仙になる「命」がない者には困難な仙道の修行を完遂するだけの強靱な意志が不足しているという。「仙命」を決定する要因は誕生時の受気の違いであり、さらにその根本の要因は全くの偶然性である。ただ、その理論の多くは切り捨ての理論として利用され、高踏的な態度を前面に押し出す傾向にある。また、内篇においても「仙命」以外に「骨」や「才」などの先天的資質を語る場面があり、先天的資質の存在は葛洪に明らかに認められていたことが分かる。

『抱朴子』内篇では、外篇よりもさらに人為の有効性を拡張し、「神仙可学」の思想を第一としているが、命定論的思考は日常的思惟として根深く存在し、その思考から脱却できない、或いは脱却しようと意識する対象にならない性格のものなようである。仙命論が、弁解や切り捨ての理論として利用され、高踏的且つ侮蔑的な傾向を生じているのは、彼の属する葛氏道の、学派としての特徴も反映しているのではないだろうか。

## 第2章 『真誥』における人の行為と資質について

葛洪と同様、上清派の場合も「神仙可学」の思想は色濃い。では、葛洪に見られた行為と先天的資質との矛盾が、それ以後の道教でも存在するか、あるとすればそれはどのような意味合いを持っているのだろうか。上清派の『真誥』を例として検討する。

『真誥』においては、「仙命」の記述は見られない。だが、人の行為以前に存在し、仙道成就を左右する何らかの影響について語られる。仙界に存在する仙籍に名前が登録されれば昇仙できるが、そこに「命」「運」「才」「骨」「相」などの先天的資質が条件としてからむ場合も多々ある。また、祖先或いは子孫の行為の影響によって、主体的に仙道に励まずとも、仙道を好む心が自然に発することで昇仙できたり、死後しばらくして死者の世界から仙界へと上昇できるという記述もある。先祖や子孫の恩沢を受ける側からすれば、その恩沢は生まれつき有している仙道への助けとなる力であり、運命や偶然によって決定された先天的資質の役割と何ら異ならない。個人の範囲を超えた修行の効果を考えるとき、それは受ける側にとっては運命的なものに他ならなくなってしまうのである。しかし、行為を伴わなければ以上の条件も無効であり、資質による制限を受けても最終的には自らの行為の如何によっては昇仙はできる。よって、昇仙のためには努力が必要という思想は残っており、個人の行為を最重要視する点は揺るがない。

葛洪の場合と比較すると、仙籍をからめた資質についての理論は、『真誥』を中心とした上清派經典では、まず修行者の精神的満足感や優越感を抱かせる要素を提供する役割がある。また、先祖の善行によって仙道への道が広がることで、救済の底辺拡大効果を有する。つまり、『抱朴子』に見えるような従来の仙道による救済範囲を上下両方向に拡充する効果を持っていた。先天的資質による昇仙を容認する思想は、葛洪以後も形を少しずつ変えつつ、人々に対して昇仙への道を広め、仙道への意欲を増進する目的で受け継がれていったと言えよう。

## 第3章 『上清後聖道君列紀』における種民思想について

### 一 『太平經鈔』甲部との関係を交えて一

『上清後聖道君列紀』は南朝種民思想を理解する際の基本的資料である。近年の研究成果によれば、『太平經鈔』甲部と敦煌出土資料中の「太平部卷第二」後文、そして『道君列紀』の間には密接な関係があることが分かっている。しかし、これらは内容が互いに出入している。ならば、種民思想についても全く同じなのであろうか。

『道君列紀』は本起的部分と教理的部分とに分けられる。本起的部分は上清金闕後聖帝君の名諱とその出生、修行と得道、そして世の人々を救済する事跡などを説明している。世界が崩壊する時、後聖帝君は善人と悪人を区別して善人を救済する。そのお陰で善人は来たるべき太平世界に生きることができる。この人たちが種民に他ならない。中には仙道を修得して仙官となる者もいる。『道君列紀』の記載によれば、仙道修行を学ぶことは種民となる必要条件ではない。一方、教理的部分はどうすれば仙官となれるかを説明する。そこではまず上清派道経の修得を重視する。上清派道経を修得できれば、太平世界に到達できるのみならず、太平世界の一国を統治する仙官となることができるのである。また、その人の賢愚に関わらず、真摯に学ぶ意志があれば仙道を修得できるとも言う。教理的部分は一方向で、神仙となる資質がなければ道経に出会うことができず、ましてや仙官となることも非常に困難である、とも述べる。しかし、このような記述は決して人の主体的行為の価値を否定しているわけではない。昇仙できるかどうかを最終的に左右するのは、自己の積徳と修行の程度である。これらの

資質は観念的なもので、修行者一人一人に資質があるかもしれぬ、という希望を持たせることにもなり、自派の教理の価値を高める効果をも有する。

『太平経鈔』甲部の内容は『道君列紀』の本起的部分に相当する部分しかなく、当然、そこで述べる内容にも上清派道教理論を強調する場面はない。また、『鈔』甲部は世界の崩壊と救済がどのように進行するかを説明することに主眼があり、『道君列紀』と比べその記述は体系的である。そこに説かれる種民思想も道経修得や先天的資質の具有を重視することもない。

「太平部卷第二」後文は確かに『道君列紀』の一部を抽出して成立したものである一方、『道君列紀』と『鈔』甲部とは内容的に符合する部分もあるが、完全に同じではない。この事実から二つの可能性が考えられる。一つは、『鈔』甲部が『道君列紀』から適当に省略して成立したというもので、もう一つは、『鈔』甲部の内容に上清派道教理論を付加して成立したのが『道君列紀』だというものである。どちらの可能性が正しいか結論づけることはできないが、今後『鈔』甲部の存在意義について研究する場合、この二つの可能性を考慮に入れることが必要である。

#### 付章 『神仙伝』の資料的価値について

##### 一六朝道教における人間観研究の一環として一

葛洪の著とされる『神仙伝』には、現在大別して三種の版本が存在する。そのうち『説孚』本は題目のみで内容がなく、『広漢魏叢書』本（以下漢魏本）については、その資料的価値に疑問があることが分かっている。そこで、最近まで見ることのできなかつた『四庫全書』所収の毛晉刊本（以下四庫本）を中心として、仙伝の配列・内容の両面から検討を加え、その資料的価値を論じることとする。

配列から見ると、配列に一定の秩序が見える四庫本は『説孚』本とその源流が同じである。また、唐代類書に引かれる『神仙伝』の条との間に入出が見られることから、三種の『神仙伝』はいずれも唐代『神仙伝』そのままではなく、それぞれ別の一部分を残している。ただし四庫本は、輯本ではあるが、葛洪の記した『神仙伝』の復元を念頭に置いて慎重に仙伝が配列されたものであることも見てとれる。

内容から見ると、漢魏本と四庫本で内容の相違が比較的小さい伝と激しい伝とが存在する。相違の激しい伝のいくつかでは、四庫本は早くとも唐代の道教思想を反映しているものがある。唐宋時代の類書に引かれる『神仙伝』と比較すると、唐代のものは明らかに漢魏本に近い一方で、中には四庫本に近い記述もあるのに加え、唐末五代の『仙苑編珠』は四庫本と密接な関係がある。宋代になると、漢魏本のもととなった『太平広記』は当然漢魏本系統であるが、『雲笈七籤』では唐代類書とほぼ同じような傾向を持つ一方で、やや四庫本にも類似性が見られる。

このように見てくると、『太平広記』、溯っては唐代類書をもととした漢魏本『神仙伝』が通行して主流となる以前には数種の『神仙伝』があり、うち一種が四庫本『神仙伝』として現在に伝わったようである。ただしこの四庫本は早くより残欠が多く、後に正史その他をもとに補った形跡がある。いずれにしても、現存する三種の『神仙伝』はいずれも葛洪当時のそのままを伝えていないことは明らかであり、葛洪の思想を探る上では利用しにくい。しかし、四庫本と唐末五代道教の関わりをさらに探る必要があるなど、研究の余地はまだ存在する。

#### 結 論

本論では、六朝時代、それも南朝における道教という、中国思想全体から見ればごく限られた範囲に的を絞り、人間観への考察を加えてきた。六朝道教において、得道のための要素として人の行為は最重要視されている。それは道教が一種の宗教であり、宗教が信者に求めるものとして信仰とともに教義の実践があるからでもある。道教では、先天的素質を説く面において、実践が願いの成就に必ずしも結びつかないことを認める。しかし、家族間救済の理論によって素質の淵源として先祖の行為が影響することを想定する上清派などでは、実践と成就との関係はより強く結びつくことになる。

人は強制や恐怖、義務感などによってはじめて行動する必要性や欲求を生じることが多い。また、自尊心や優越感を助長された場合も同様である。道教經典の資質を語る部分は後者の効果を持つ。見方を変えると、仙籍を媒介して自分たちを管理している神々に対して、人々は自らの将来を委ねるしかない。その神々に仙籍登録、資質などによって救済を保証されることは、神々への心理的依存度が強いほど、信者の満足感などを増大する。このように、六朝道教に見える資質の理論は人間の心理と深く関わっている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、六朝道教における人間観を主として運命論の観点から考究したものであり、三章からなる本論と附章一篇、および序論と結論で構成されている。

ここでいう運命論とは、人の資質と境遇は生まれつき定められた運命によって決定されており、人の行為・努力ではそれを変えることはできないとする考え方を指し、それに対立するのが人の境遇は行為の善悪に応じた結果であるとする因果論である。この両者の対立は、時代・分野を問わず常に議論されつづけてきた、中国思想史全体を通じての最大の問題の一つである。道教においては、この対立は、仙人になれるのは特別の素質「仙命」を有する者に限られるとする仙命論と、仙道修行をすれば誰でも昇仙できるとする「神仙可学」論の対立として現れる。本論文の考察もこの二論をめぐる形で進められている。

第一章「葛洪における運命と仙命」では、神仙道家葛洪の『抱朴子』を取り上げ、その運命論と因果論との混在の様相を詳細に究明し、「神仙可学」を主とする立場を一貫して堅持しつつも、当時流布せる命定論的思考が日常的思惟のうちにまで根深く食い込み、その影響を脱し切れていないことを論証している。内篇における「神仙可学」論と仙命論の混在は、葛洪の神仙思想における重大な矛盾としてこれまでもしばしば論議されてきたものであるが、内篇に加えて外篇をもあわせて考察し、『抱朴子』全体を統一的体系的にとらえた研究はいまだ少なく、本章はこの点でまず希少価値を有している。また葛洪が運命論と因果論の併存を半ば意識的に容認していたであろうことや、運命論が凡人の切り捨て理論として用いられる傾向をもっていること、そしてそれが少数エリートへの昇仙を目指す葛洪の本質に由来するものであることを論じているのは、注目に値する新見解である。その他、葛洪に影響を与えた人物として運命論における李康、因果論における嵇康、さらに両論併存の陸機を取り上げて比較検討しているのも目新しく、葛洪のみならず、当時の運命論全般の状況を知る上でも得るところの多い有意義な試みである。

第二章「『真誥』における人の行為と資質について」では、上清派道教の基本経典たる『真誥』における人の行為と先天的資質との関係が詳細に検討されている。論者によれば、『真誥』には仙命に関する記述は見られず、葛洪と同様、仙道修行の必要性を基本的立場としている。しかし一方では、昇仙候補者名簿である仙籍に登録されるに際して、「命」「運」「才」「骨」「相」などの先天的資質が登録条件としてからむ場合が多々あり、また祖先あるいは子孫の行為の影響によって、生まれつき仙道を好む心を備えていたり、ときには格別の努力なしに自動的に救済されたりすることがしばしば論じられている。論者は、このような資質や恩沢は当人の主体的努力ではいかんともしがたいという点で一種の運命にほかならず、実質的に仙命にあたるという。ただ、このような祖先の功德は一面より見れば自らの行為の善悪が子孫の禍福として現れるという伝統的応報説でもあり、それゆえにこの先天的条件は「神仙可学」論と仙命論の橋渡しとしての機能を有することとなり、両者が矛盾なく同居し得たのだという。これはまことに巧妙な解釈であり、注目に値する。またその二面性により、この運命論は葛洪におけるがごとき切り捨て理論としてではなく、むしろ仙道修行を激励する役割と作用を果たしたとする主張も首肯できるものである。

第三章「『上清後聖道君列紀』における種民思想について」は、南朝道教の種民思想の代表的資料たる『道君列紀』について考察したものである。種民とは、世界の終末に際し、選ばれて救済され、来るべき太平の世に生きることを許された善人のことである。論者によれば、『道君列紀』においては、種民となるには善行を積むだけでよく、特段の仙道修行は必要とはされていない。しかし、その上の仙使・仙官となるためには修行が不可欠で、とりわけ上清派道経の修得が肝要とされており、『道君列紀』の主眼はむしろこの点にある。またその修得には資質の賢愚は関わらないとされる一方で、また神仙となる資質がなければその成就是困難とも述べられていて、従来よりの「神仙可学」論と仙命論の矛盾はここにもなお残存している。ただし、それはあくまで困難というだけのことであって、人の主体的行為の意義を否定するものではなく、最終的に昇仙できるかどうかを決定するのは、自己の積徳と修行の程度いかんである。かくのごとく論者は『道君列紀』の思想的矛盾を巧妙に解決しているが、さらに追論して、これは修行者に選ばれた者としてのエリート意識と修行完成の希望を与えるとともに、自派の優位性を高め宣伝する効果を意図したものと見ている。これも納得のいく説と言える。

このように本章も基本的には着実に説得力に富む議論が展開されているが、ただ、所論のもう一つの目的である『太平経

鈔』甲部との関係については、行論にやや明晰さを欠くきらいがあり、中途半端なままに終わっているのは惜しまれる。

以上述べたごとく、本論文はよく資料を読み込み、先人の業績もよく調べた上で、篤実周到な考察を積み重ねており、その所論はおおむね肯綮にあたるものと認められる。また独自の見解も各章それぞれに提示されており、独創性にも不足するところはない。章を逐うごとに、仙命に関わる対象の範囲を広げていく構成も巧みである。六朝道教における運命論に関する諸問題のおおかたは、本論文によってほぼ尽くされたと称しても過言ではなく、爾後、六朝道教研究に一定の地歩を占める業績と確信される。なお附章は『神仙伝』に関する文献学的考証であるが、精審緻密に考証が進められていて学術的価値が高く、とくにその諸本の異同表は貴重な成果であることを付言しておく。

ただ、通覧してみれば、全般に同じような議論の繰り返しという感じがなく、この点の本論文の魅力をやや殺いでいることは否めない。本論文は、いささか運命論や因果論にこだわりすぎた憾みがあり、道性論や身体観などにももう少し言及していれば、さらに人間観という論題にふさわしい豊かな内容になったのではないかと惜しまれる。しかし、このことは論者自身がすでに十分自覚し、今後の研究の課題としているところであり、その将来の進展に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年2月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。